

# 博物館と園芸文化

篠田真理子(人間社会学部人間環境学科)

## <はじめに>

千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館(通称歴博、以下歴博と略称する)を訪れたことがおありの方も多いいことだろう。民衆の歴史を展示するという構想の下にたいへん充実した展示を行っている博物館である(博物館紹介は、文末の囲み記事をご覧ください)。

2005年4月一日、歴博を見学する機会を得た。今回は、併設の「くらしの植物苑」と博物館の周辺を特にご案内していただいた。それゆえ、その点を中心に報告したい。筆者は歴博を見学したことはあったが、くらしの植物苑は未見であったことと、園芸と博物館の関係に注目したいと思ったからである。

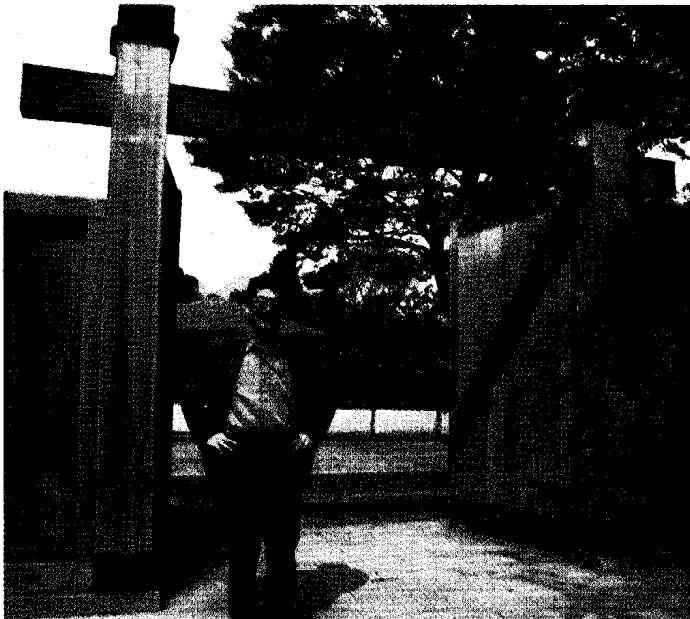


写真2 篠原徹教授(くらしの植物苑入り口にて)



写真1 箱田先生寄贈のサザンカの鉢(苑内温室にて)

くらしの植物苑には恵泉女学園大学の箱田直紀先生がサザンカを寄贈なさっているというご縁もある(写真1)。

今回は歴博の篠原徹先生[1](写真2)と環境史研究部門の吉村郊子先生[2]がご案内くださった。

### <歴博の地理>

歴博の地理的位置について概観しておきたい。博物館の建物は、佐倉城が築かれていた台地状の小高い丘の上にある(写真3)。城があったところは現在、佐倉城址公園になっており、丘の斜面は広葉樹と針葉樹の混在した鬱蒼とした木々に覆われている。城は明治維新後に取り壊されたが、空堀・土塁や曲輪の跡がいまも残る。

<http://www.rekihaku.ac.jp/about/sanpo/castles.html>

明治から第二次大戦終結までは旧陸軍の兵舎や錬兵場、病院に利用された。篠原徹先生と吉村先生のご案内で、博物館から公園を歩いてくらしの植物苑へと歩く。公園内にはそれぞれの時代をうかがわせる痕跡がかずかず残っているとのことである。縄をなうために植えられたのではないかと推測されるシュロなど、有用木として植えられたことが伺える樹種が散在している。後に述べるくらしの植物苑だけではなく、公園内でもかつての生活と植物の関係を見ることが出来る。明治から戦前期までの兵舎や訓練のための遺構を見ることが出来る。城址公園をじっくり歩くといろいろな



写真3 丘の上に立つ歴博



写真4 湿地を生かした花菖蒲園

発見があるようだ。公園内姥が池の付近は谷津(谷戸)のような地形になっており、その先には花菖蒲園が作られている(写真4)。

## <くらしの植物苑>

博物館と同じ台地上に、くらしの植物苑が設けられている。植物苑は1995(平成7)年に開設された。植物苑の入り口は写真2のように冠木門になっていて趣がある。植物苑の特徴は、苑内をエリアに区切り、それぞれ6つの動詞「食べる」、「織る・漉く」、「染める」、「治す」、「道具を作る」、「塗る・燃やす」に対応する植物を植えているところにある。(写真5)動詞で植物を区画・分類するという発想がたいへんユニークである。



写真5 テーマ別に区切られた苑内(ここでは織る・漉くがテーマ)

たとえば、「織る・漉く」のエリアにはシナノキ、フジ、バショウ、イチビ、カラムシ、ワタ、コウゾ、ミツマタなどが植えられている。「塗る・

燃やす」のエリアにはウルシ、ハゼノキ、エゴマ、アブラギリ、サイカチ、アブラナなどがあり、ウルシは漆塗りに用いることはもちろん、ろうそくの蠟としても用いられていた。他に各エリアには次のような植物がある。

「染める」……………ムラサキ、アカネ、ウコン、クチナシ、リュウキュウアイ、コムラサキなど

「治す」……………ドクダミ、カタクリ、ヤマモモ、ハコベ、サフラン、イチヨウ、ナンテン、クコ、ゲンノショウコ、オトギリソウ、ヤシャブシなど

「道具を作る」…ススキ、ヘチマ、マツ、スギ、エノキ、ツゲ、カツラ、ホオノキ、ヒヨウタン、クヌギ、ヤナギ、サワラなど

「食べる」……………ウド、フキ、アケビ、ミツバ、タラノメ、ギボウシ、ナデシコ、ヤマユリ、ケンボナシ、キンカン、トチノキ、ザクロ、ウメなど

このようにくらしの中で利用されてきた植物を、標本としてでなく生物として見せているのである。生物であるから、季節ごとに花が咲いたり、結実したり、芽が出たりする様子を見られる。植物苑では毎月第4土曜日に植物観察会が開かれており、そこで解説してもらったり講演を聞くこともできる。

博物館で各地の民俗や農具・用具の展示を見、植物園で生活の中で利用されていた植物を実見できるというのは、博物館・植物園相互の連動としても興味深い。

ただ残念なことに、苑内で植物の利用法を見せたり体験させる仕組みはないそうである。その点をお尋ねすると、活用をする人員や体制が現在のところ博物館側にはないとのことであった。博物館だけでは対応できないとしても、外部から協力者を募るなどして、紙を漉いたり火をおこしたり、染色したりする体験が出来たら楽しいのではないかと考えながら歩いた。

すると、たまたま見学中の年配の女性の二人連れが近くを通りかかった。その方たちは「ああ、わらびだわ」「わあ、いっぱい出ているわ」と感嘆し、今にも手を出して摘みたそうに見えた。ここにあるのは植えてあるもので“生えてきた”ものではないのだが、その女性らには山菜摘みの思い出があり、はからずも出てきた言葉のように聞こえた。

植栽された植物が、もともと生えている場所で利用した・食べた記憶を思い出したり追体験するきっかけとなる。こうした追体験も広い意味では博物館のひとつの機能であると言われているが、そうした機能をこの植物苑も果たしているのだと思われた。

突然話が大きくなってしまおうのだが、西欧近代における博物館や植物園はもともと、西欧世界が地理的拡大をする過程で遭遇した植物や動物や彼らにとって珍しい事物を収集する、つまりその場から持ち去ってヨーロッパに持ち帰り、見せる、というのが始まりであった。これは、持ち去られる側から見れば収奪である、と兼ねてより指摘されている。

歴博本館の展示方針として「現場にあるものはその現場に置くべきであ

り、収奪しないようにする、そのためレプリカを展示していることも多い」と話す篠原先生。植物苑の植物は、希少種や絶滅危惧種などでなくありふれている(いた)植物が多いので、収奪ということはない。

だが、日本列島各地における利用を展示することを視野において、関東の植物に限っていないため「この土地に合わない植物もある」とのこと[3]。こうした困難を持ちつつも、あるはたらき(「治す」など)を持つ多種多様な植物を一度に見られることには利点がある。ある地域で体験したり目撃したりした植物民俗的利用法について、ここでその記憶を蘇らせることもできるし、同じ働きをする別の植物を知る(新たな知識を得る)こともできるからだ。環境民俗学的視点から地域の植物と人間の生活とのつながりを考える手がかりにもなるだろう。

人間の利用する「動詞」にあわせて植物を配置するというユニークな発想の植物苑から、いろいろと考えさせられた。

### <園芸と文化：くらしの植物苑での企画展>

植物苑では企画展として園芸種として独自の発達を遂げた花の展示が行われている。取り上げられているのは、園芸植物として品種改良が加えられたさまざまな植物である。サザンカやサクラソウ、朝顔などは江戸時代以降、何回かブームがあり、多数の品種が作り出され、その美しさを競ったという。

今年はパンフレット(写真6)の時期にそれぞれの種類の花を見ることができる。



写真6 くらしの植物苑パンフレット

これは園芸文化を目の当たりにする絶好の機会であり、遺伝やDNAの知識がない江戸時代以降の人々が交配と選択だけで作り上げたあまりに大きな変化を、生きた花で実感する機会でもある。とくに形や色の変化が多様な朝顔展(8月9日～9月4日)、箱田先生がそれまでに収集した多数の品種が見られるサザンカ展(11月中旬～1月中旬)は、多くの方においでいただきたいとのことである。筆者も博物館で行われる園芸文化の生きた「実動」展示を見るためにぜひ再訪したいと思う。

### <おわりに>

最後になりましたが、篠原徹先生と吉村郊子先生、丁寧にご案内くださり、どうもありがとうございました。

### 参考文献

- 「くらしの植物苑だより」No.1～96(1998年4月29日～2005年3月23日)。  
『国立歴史民俗博物館ガイドブック』、2002年。  
国立歴史民俗博物館図録『伝統の朝顔』、1999年。  
国立歴史民俗博物館図録『伝統の朝顔Ⅱ芽生えから開花まで』、2000年。  
国立歴史民俗博物館図録『伝統の朝顔Ⅲ作り手の世界』、2000年。  
国立歴史民俗博物館図録『冬の華・サザンカ』、2001年。  
国立歴史民俗博物館図録『季節の伝統植物』、2002年。

### 国立歴史民俗博物館

1981(昭和56)年に設置された、日本の歴史と文化について総合的に研究・展示する国立の歴史博物館。所在地は千葉県佐倉市城内町117。最寄り駅は京成佐倉かJR佐倉。

歴博のホームページはこちら。<http://www.rekihaku.ac.jp/>

第1～第5展示室に分かれており、第1展示室(旧石器時代から律令国家成立まで)、第2展示室(平安時代から安土桃山時代まで)、第3展示室(江

戸時代)、第4展示室(日本人の民俗世界)、第5展示室(近代の出発から1920年代まで)がある。民衆の観点から見た歴史を構築し、暮らしや北海道開拓とアイヌの人々、差別された人々、女性の生活などにも目を向けている。

館蔵資料はデータベースで検索でき、画像が収録されている資料についてはインターネット上で見ることもできる。

<http://www.rekihaku.ac.jp/database/gazo/index.html>

全国の博物館図録の展示即売コーナーがあることも特色のひとつである。館内で全国の博物館図録を並べており、手にとって見たり購入したりすることができる。地方の博物館図録はなかなか手に入りにくいものであり、まとめて入手できるのは便利である。

通信販売でも購入できる([shop@rekishin.or.jp](mailto:shop@rekishin.or.jp))。

国立歴史民俗博物館は広大な面積に充実した展示が行われているので博物館を訪れる前に図録を読んで予習し、見たいものの焦点を絞っておくのも賢い鑑賞法であるのこと。

---

[1] 国立歴史民俗博物館民俗研究系社会伝承研究部門教授。主要著作に「民俗の技術とはなにか」『民俗の技術』(朝倉書店、1998)、『アフリカでケチを考えた—エチオピア・コンソの人びとと暮らし』(ちくまプリマーブックス、1998)、「自然に対する新しい価値創出の可能性」『循環型社会の先進空間』(農山漁村文化協会、2000)、編書に『近代日本の他者像と自画像』(柏書房、2001)他。

[2] 国立歴史民俗博物館歴史研究系環境史研究部門助手。主要著作に「炭焼きとして現代を生きぬく」『現代民俗誌の地平1 越境』(朝倉書店、2003)。「土地と人をつなぐもの—ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓」『遊動民(ノマッド)—アフリカの原野に生きる』(昭和堂、2004)他。

[3] これに対して、ある地域にもともと存在する家屋や動物や植物を集めて展示することを意図するのがエコミュージアム(エコミュゼ)である。篠原先生にはエコミュージアムについてのお考えも伺ったが、この稿の主旨とは外れることになるだろう。別稿を期すことにしたい。